

日本経済への 最後の警告

JOHN KENNETH GALBRAITH
THE LAST WARNING TO THE
JAPANESE ECONOMY

角間隆〔訳〕

ジョン・ケネス・

ガルブレイス



112
D2
609

JOHN KENNETH GALBRAITH
THE LAST WARNING TO THE
JAPANESE ECONOMY



日本経済への 最後の警告

ジョン・ケネス・ガルブレイス



Ya84/1977

2002年11月18日

徳間書店

RE

【訳者略歴】

角間隆（かくま・たかし）

1936年9月生まれ。東京大学卒業後、NHKに入社。報道局で活躍する一方で、世界の有力メディアと提携してグローバル・ネットワークの構築にあたった。1964年から2年間、コロンビア大学に留学、ジャーナリズム大学院でメディア論および新聞学、放送学を専攻。1980年に独立。ノンフィクション作家、評論家として精力的な執筆活動を行う。また国際ジャーナリスト会議理事長を務め、世界の指導的な有力ジャーナリストたちとグローバルな情報ネットワーク活動を展開している。
主な著書『ビンラディン対アメリカ〜報復の連鎖』（小学館）『マスヒステリーの研究〜民衆の踊らせ方の研究』（角川書店）ほか多数。

日本経済への最後の警告

第1刷——2002年7月31日

第2刷——2002年8月20日

著 者——ジョン・ケネス・ガルブレイス

訳 者——角間隆

発行者——松下武義

発行所——株式会社徳間書店

東京都港区芝大門2-2-1 郵便番号105-8055

電話 編集部(03)5403-4344 販売部(03)5403-4323

振替00140-0-44392

（編集担当）青山恭子

印 刷——十一房印刷工業(株)

カバ
印 刷——真生印刷(株)

製 本——大口製本印刷(株)

©2002 Takashi Kakuma, Printed in Japan

乱丁・落丁はおとりかえ致します。

ISBN4-19-861547-0

日本経済への最後の警告

目次

第1章 日本経済へ警告する.....7

今こそ日本の底力を示せ.....	9
日本人への信頼.....	13
誇りと自信を取り戻せ.....	17
指導者の視野.....	20
「金持ち重視の経済学」の失敗.....	23
政府の責務とは何か.....	27
もはや理論よりも実行あるのみ.....	29

第2章 自由放任主義の落とし穴.....35

国民が政府を見放す時.....	39
失業は本人の責任なのか.....	41
自由放任主義はなぜ生まれたか.....	45
神の「見えざる手」に任せよ.....	54
「供給はそれ自身の需要を生み出す」.....	58
不況知らずの経済理論.....	64
「ソーシャル・ダーウィニズム」の冷酷さ.....	69
「個人」の力だけではどうにもならない時もある.....	76
立ち尽くすだけの「古典派経済学」.....	79

第3章 「バブル」から「大恐慌」への歴史……85

私の生き立ち……………	90
大衆を巻き込んだ政治……………	93
ウィルソンの挫折……………	96
「空前のバブル」へ……………	99
アメリカ支配階級の腐敗……………	101
狂乱の経済……………	104
「暗黒の木曜日」の教訓……………	111

第4章 ケインズ経済学の革命……115

人間愛と経済学の結合……………	119
マーシャルの経済学……………	123
ケンブリッジ学派の胎動……………	126
ケインズの栄光と悲惨……………	130
チャーチルが犯した「大間違い」……………	137

第5章 真の改革に必要なもの……141

「働きたくても働けない」社会……………	145
「社会的弱者」の支持……………	147
真の改革にはスピードが不可欠……………	150

「USドル」の時代	154
激動の経済	158
「ニューディール」と敗戦国日本	161
「何かが変わり始めている」	163
「ニューディーラー」としての活動	166
政府の果たすべき役割	169
反対勢力との死闘	173
ニューディールを中断させた第二次大戦	175

第6章 21世紀を先導する経済思想とは 179

不況への処方箋	182
シュンペーターの理論	185
守旧派の反攻	188
「連邦準備制度」とケインズ革命	190
ハンセンとサミュエルソンの功績	193
ケインズ教授の教え	195
柔軟な現実的対応策	199
「人類社会」への温かい目配り	202
「マーシャル計画」の役割	204
「ルーズヴェルト死す」	207
「戦後日本」復興の中核となったケインズ主義	209
戦後世界のケインズ革命	214
「日本の奇跡」を支えたもの	217

第7章 日本経済の未来……………221

「失われし時」の貴重さ……………223

「豊かな社会」における「公共投資」とは……………226

日本のリーダーに求めるもの……………229

小泉首相への提言——「哀れなフーヴァー」の二の舞になるな…232

政治への信頼なくして景気回復なし……………235

訳者あとがき……………239

第 **1** 章

日本経済へ警告する

今こそ日本の底力を示せ

いま、日本経済は未曾有^{みぞう}の低迷状態に直面しています。

一九六〇年代の急成長期から一九八〇年代後半の絶頂期にかけての「栄光の日々」の印象と記憶があまりにも鮮烈であったため、アメリカや西ヨーロッパを含む資本主義経済の先進国ばかりでなく、アジアやアフリカ、ラテンアメリカ諸国の中からさえ、

「いったい日本はどうなってしまったのだろうか？」

「ジャパン・アズ・ナンバーワンなんて、所詮^{しよせん}はフォニー（phony＝偽物、見かけ倒し）だったのか」

などといった冷笑と揶揄^{やゆ}の声が聞こえてきている。そのために日本人のかなりの部分がすっかり気落ちして自信を喪失しているような気がしてなりません。

経済学には「景気循環論」(business cycle theory)というものがあり、どんなに悪い状態にまで落ち込んでも、必ずや回復に向かう時が訪れる。経済というのは恒常的に「谷」(trough)と「山」(peak)の循環サイクルの中にあるから、たとえ一時的な不況(depression)や停滞(recession)に見舞われてもそんなに深刻に考えることはない、と言われてきました。特に、近代経済学の始祖と仰がれているアダム・スミス(Adam Smith 1723～90年)から始まった「古典派経済学」は、

「『見えざる手』に導かれて、常に完全雇用が自動的に維持される」

という文字通り古典的な「予定調和」(harmonie preetablie)の考え方を基礎としていますから、一九二〇年代のアメリカで喧伝されたような「永遠の繁栄」はあり得るとしても、「永遠の不況」などというものは存在し得ない、ということになります。

しかし、現在の日本のように「一〇年不況」どころか、すでに「一二年不況」を通り越して、「ひよつとすると、『二〇年不況』にまで向かうのではあるまいか」

といった底知れぬ不安心理が働き始めているところでは、もはやライプニッツ(Gottfried Wilhelm Leibniz 1646～1716年)的な「予定調和」論は通用しなくなりつつあります。すなわち、経済の実態がどうであれ、自動的に完全雇用に向かうという本来的にオプティミスティックな理論の可否がどうであれ、現実の倒産件数や失業者数は日増しに激増している。こうし

た厳然たる事実を目の当たりにしては、

「一時的な『痛み』を耐え忍ばなければならない。ペイン（苦痛）なきゲイン（利得）など、この世にはあり得ないのだ」

という小泉首相の深遠な『哲学』もどこへやら、人々の気持ちはどんどん暗くなる一方なのです。ついには、「米百俵いますぐ食わせろ！」といったふうの社会的騒乱にまで発展していきかねません。

これが「恐慌」(crisis)という現象で、要するに人間心理の弱さゆえにパニックにとらわれた人々が、一斉にあらぬ方向に暴走し始める「スタンピード」(stampede)現象が起こり、せっかくの「神の見えざる手」をもってしても制御のしようがなくなってしまうわけです。

近代資本主義の歴史が始まったのは一八世紀末のイギリスに端を発する「産業革命」以後のこととされていますが、一八二五年には早くもそのお膝元イギリスで人類史上初めての「恐慌」が勃発し、以後はほぼ一〇年ごとに、規模こそ異なれ同じような「経済危機」が繰り返されてきている、というのが残念ながら人類社会の偽らざる実態です。

中でも最大の「恐慌」は一九二九年一〇月のニューヨーク証券取引所における株価大暴落を引き金とした「大恐慌」(the Great Crash)で、結局その衝撃は地球社会全体に波及し、史上最悪の「世界恐慌」(the World Crash)にまでエスカレートしてしまいました。

幸か不幸か、その世紀の初頭一九〇八年に生まれた私は、問題のクラッシュ（Crash）衝撃による大崩壊の根本原因となった第一次世界大戦後の空前の「バブル景気」の時代から、世界恐慌の果てに人類社会全体を有無を言わず巻き込んでしまった第二回目の不幸な世界大戦に至るまで、つぶさに目撃し、特に後半においては自らその收拾と対策に奔走したのでした。

そのような意味で、いま最愛の日本の皆様が、うち続く不況と不安の中でどれほど絶望的な気持ちになりかかっているか、いかに自信と誇りを傷つけられ、アイデンティティ（日本人であること）そのものへの喪失感にさえ直面し始めているか、手に取るように分かるのです。

しかしながら、それでは困るのです。なぜなら、かつては「世界を牽引する三大機関車」と呼ばれ、中でも特に優秀なリーディング・ロコモティブとして「日本に学べ！」と絶賛を浴び、栄光の「日本モデル」を国際社会全体に提示したナンバーワン国家が、そのような形ですっかり萎縮したまま何一つとしてこの不況への有効な処方箋を示し得ないということになったら、それこそグローバル社会全体がパニックに襲われ、とんでもない暴走現象を引き起こしかねないからです。

今こそ日本および日本人は、潜在的に内包しているその底力を思いきり発揮して、まず日本経済を根本的に立て直し、なおかつその余勢を駆って、一気に世界経済全体を活性化し反転・成長させる原動力としての役割を果たすべきなのです。

日本人への信頼

あの一九四五年八月一日、日本がポツダム宣言を受諾したその日、私はアメリカの首都ワシントンDCで、一万三〇〇〇人以上の部下を叱咤^{しつた}激励しながら、

「どうしたら戦時下の物価高騰を抑えて、アメリカ国民の生活を安定させることができるか」

を探る仕事に心血を注いでいました。忘れもしません、その頃、広大な大部屋の片隅で、アメリカ国民の一人一人に対して、「政府を信用してついでてくださいい！」という手紙をせっせと書いていた五歳年下の青年がいました。のちの「第三七代合衆国大統領」リチャード・ミルハウス・ニクソンです。驚くべきことに、彼もまた若い頃は熱心な「ニューディーラー」の一人だったのです。

そして私は、「日本が無条件降伏に応じた」というニュースを聞いた直後にホワイトハウスに呼ばれ、そのわずか四カ月前に私の最も敬愛するフランクリン・デラノ・ルーズヴェルト（一九四五年四月脳溢血^{いっけつ}で死去）から後事を託されたばかりのハリー・トルーマン（Harry S. Truman 1884～1972年）新大統領の口から、

「直ちに日本に飛んで、爆撃による被害状況をつぶさに調査し、これからの日本をどう再建し復

興させるかについての具体的な青写真を示してもらいたい」

と頼まりました。弱冠三五歳の若手学者にすぎなかった私にとっては過分の重責であり、また名誉でもありました。

ダグラス・マッカーサー元帥が、「連合国軍最高司令官」として日本に乗り込んだのはそれから二週間後のことですが、私は「戦時物価統制局」の総責任者としての仕事の整理や引継ぎの問題もあり、クリスマスも過ぎた頃に東京に降り立ちました。何しろ、終戦直後の旧「敵国」に乗り込むのですから、ゲリラの襲撃などいかなる不測の事態や事件が起こるかも知れません。そのため、それまでどんな時でも私と行をともしてきてくれた愛妻キャサリンには、

「今度ばかりは一人で行かせてほしい」

と無理やり言いくるめて、単身、日本行きの軍用機に乗り込んだのです。

宿舎としては、マッカーサー総司令官が進駐軍のGHQ（総司令部）を構えたばかりの旧第一生命保険ビルから数ブロックしか離れていない「帝国ホテル」の一室を与えられました。あの激しい東京大空襲にも立派に耐え抜いた堂々たる石組・煉瓦造りの近代建築で、我がアメリカの誇る名建築家フランク・ロイドが一九一六年にわざわざ日本までやってきて、心血を注いで設計・建築したものだと聞きました。

思えば日露戦争のとき、時の合衆国大統領セオドア・ルーズヴェルト（Theodore Roosevelt